安芸高田市第 2 次総合計画

計画構想案(素案)140806

安芸高田市第２次総合計画

安芸高田市　市民憲章

わたしたちは、安芸高田市民であることに誇りと責任を持ち、
市創設の基本理念である「人　輝く・安芸高田」の実現をめざして
この憲章を定めます。

わたしたち安芸高田市民は、

一、　歴史・文化・自然を大切にし、未来へつないでいきます。

一、　先人を尊（たっと）び心豊かな人間形成をめざします。

一、　「三矢の訓（おしえ）」で心をひとつに「協働のまちづくり」にはげみます。

一、　誰もが健康で、きれいな住みやすいまちをつくります。

一、　笑顔あふれ、安心安全に暮らせるまちにします。

はじめに

市長顔写真

平成 27 年 3 月

安芸高田市長　　（自筆サイン）

目　次

第1章　序論

1 計画の概要 1
2 当市の特性 3
3 当市をとりまく基本課題 9

第2章　基本構想

1 将来像と基本方針 11
2 重点プロジェクト 13
3 施策体系 15
4 土地利用構想 17
5 効果検証の総合指標 19
6 計画の推進体制 21

第3章　基本計画

資料編

第１章

序論

1　計画の概要

1　計画策定の趣旨

平成 16 年 3 月 1 日、高田郡 6 町が合併し、新たに「安芸高田市」が誕生しました。

平成 17 年度には、新たなまちづくりの中長期的な方向を示す最初の「安芸高田市総合計画」を策定し、私たちは「人　輝く・安芸高田」の実現に向け、住民と行政による協働のまちづくりを進めてきました。

これまでの 10 年間を振り返ると、我が国は全国的な人口減少・少子高齢化社会へと突入し、社会保障費のさらなる増大、産業・まちづくりの担い手不足等、その状況はますます深刻化する状況にあります。

また、平成 23 年 3 月に発生した東日本大震災とそれに伴う原子力発電所災害は、防災・エネルギー政策の考え方を根本から見直す必要性を突き付けられました。

世界に目を転じれば、リーマンショックに端を発する世界的な金融危機、アジア経済の活性化、ＴＰＰ交渉といった世界的な経済動向が、製造業・農業を基幹産業とする当市にも大きな影響を与えています。

その一方で、モノの豊かさから心の豊かさへ、といったニーズ変化の中で、グリーンツーリズム・田舎暮らし等、地方でのゆったりとした生き方が見直されつつあります。

また、光ファイバーやスマートフォン等、情報通信技術の目覚ましい進展は、住民同士のつながり、世界を含めた他地域とのつながりをより強固なものへと導きつつあります。

安芸高田市第 2 次総合計画は、私たちが合併以来取り組んできたまちづくりを振り返るとともに、これら時代の変化を受け止め、市民と行政が新しい時代に向けた目標を共有し、踏み出していくための指針として策定したものです。

2　計画の対象期間

本計画の対象期間は、平成 27 年度を初年度とし、平成 36 年度を目標年度とする 10 年間です。

3　計画の構成

本計画は、3 つの章と資料編から構成されています。各章の位置づけは、以下のようになっています。

第 1 章　序論
計画の概要、当市の特性、当市をとりまく基本的課題について整理しています。

第2章　基本構想
当市が目指す将来像とその理由、将来像実現に向けた基本方針と土地利用構想、重点プロジェクト、施策体系について整理しています。 また、計画の円滑な推進を図るべく、その体制、基本指標となる目標人口についても整理しています。

第3章　基本計画
将来像の実現に向け、当市が今後 10 年で取り組むことを分野別に整理しています。

資料編
計画策定にあたり実施した市民アンケート結果や、策定体系、策定に携わった方々の名簿、用語解説を整理しています。

2　当市の特性

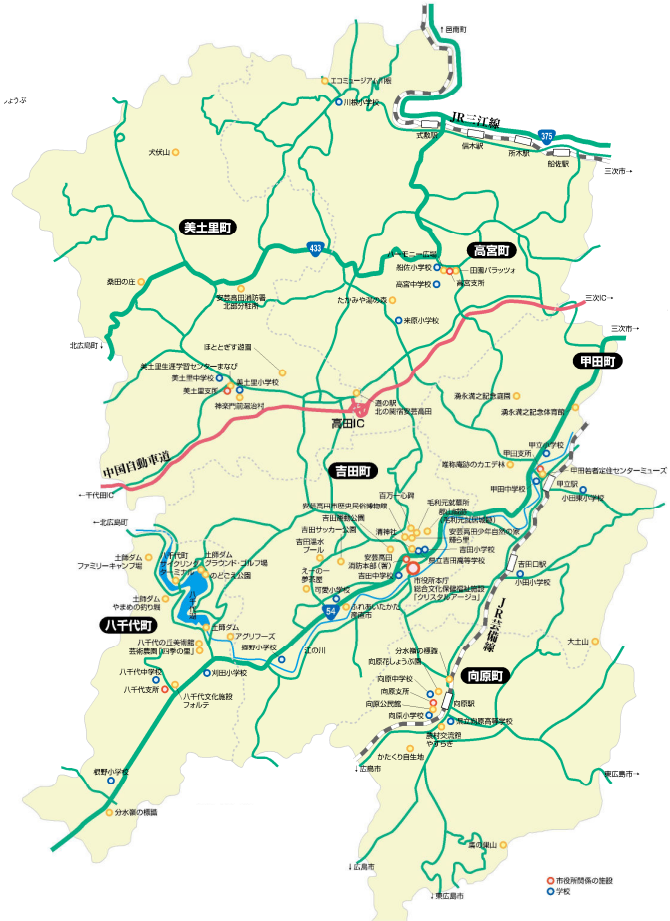
1　地勢・自然

当市は、広島県の中北部に位置する中山間都市で、北は島根県、南は広島市に隣接しています。これら隣接県・都市とは、中国自動車道、国道 54 号、ＪＲを中心に接続されています。

当市の面積は 538．17km² ですが、その 8 割は森林によって占められており、市域内には鷹の巣山、大土山、犬伏山など大小さまざまな山が立地しています。

また、中央部には江の川が森林を縫うように貫流しており、北部は生田川、本村川が東流して江の川へ、南部は三篠川が西流して太田川へ合流しています。

この山並みと河川が調和することで、当市はこまやかで落ち着きある景観を形成しています。



2　歴史・文化

当市は、戦国時代における有力武将の一人であった毛利元就がその生涯を過ごした地であり、市域内には毛利氏ゆかりの史跡が数多く残されています。毛利氏が残した有名な教訓「三矢の訓」「百万一心」は、いずれも一致団結の大切さを伝えるものであり、その教えは今も市民の心の中で生き続けています。

また、当市には 22 の神楽団が在籍し、「ひろしま安芸高田神楽」の継承・普及を図るべく、舞手たちは日夜その技の鍛錬に励んでいます。迫力のある舞、舞殿から響くにぎやかなお囃子は、舞手自身・観客もおおいに楽しむことができます。このため、公演の場は宮中に限らず、県内外のお祭りやイベント等にも広がりを見せています。

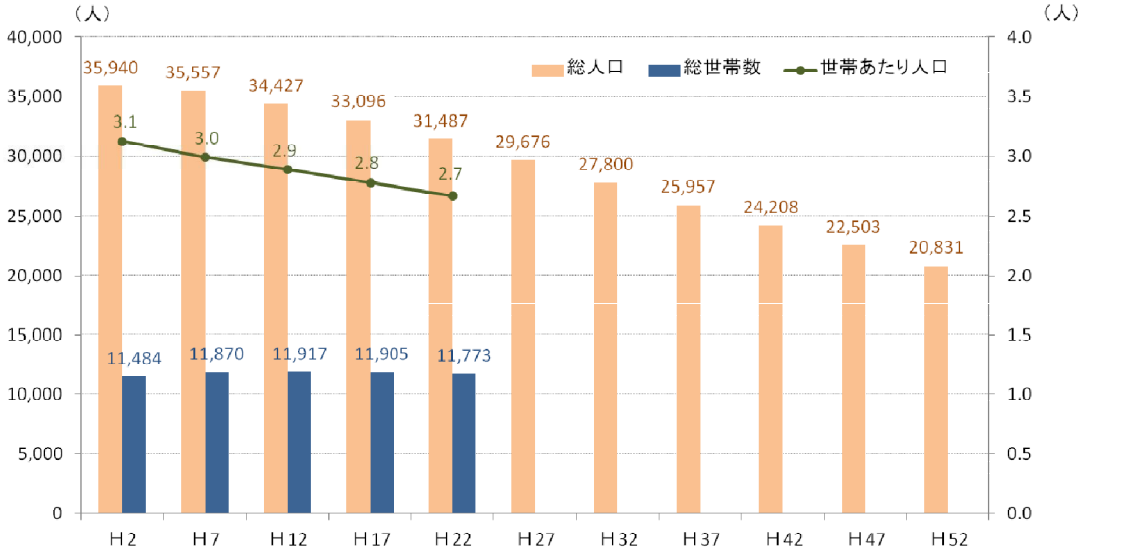
これら古くからの文化のみならず、近年はスポーツ文化も根付いています。プロサッカーリーグサンフレッチェ広島のチーム名は、毛利氏の「三本の矢」を由来としており、この縁がきっかけとなり、チームの練習場が当市に整備されました。また、当市に立地する湧永製薬は、日本有数のハンドボール実業団チームとして知られ、近年、安芸高田市生まれの選手も誕生しました。

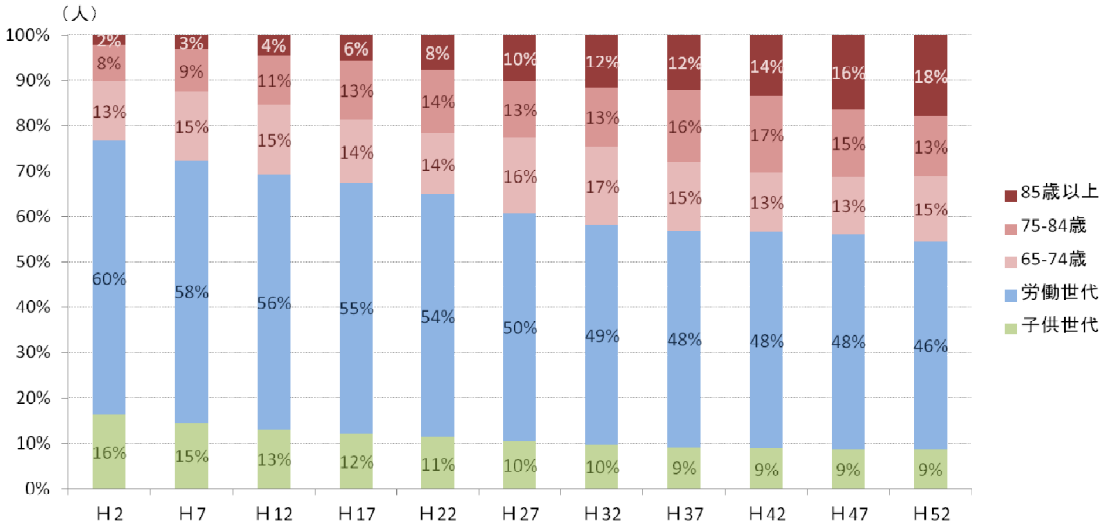
いずれのチームも定期的なスポーツ教室を開講しており、プロと間近に触れ合える環境が、子供たちに大きな夢を与えています。

3　人口構成

安芸高田市の総人口は 31，500 人(平成 22 年)で、10 年後(平成 37 年)に 26，000 人弱、25 年後(平成 52 年)に 21，000 人弱にまで減少することが予想されています。

高齢世代割合は、今後高止まりに向かうものの、85 歳以上に着目すると、その割合は上昇を続けていくことが予想されます。



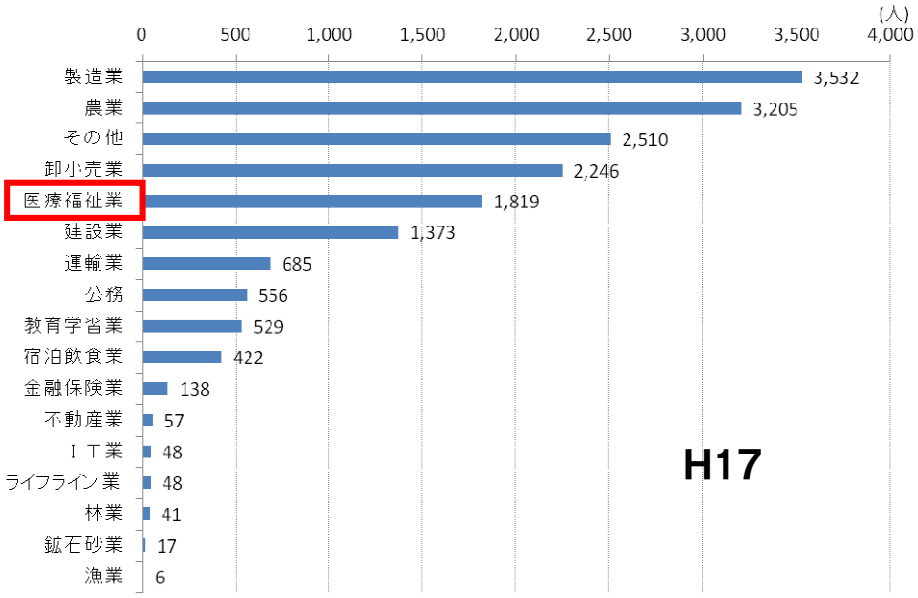


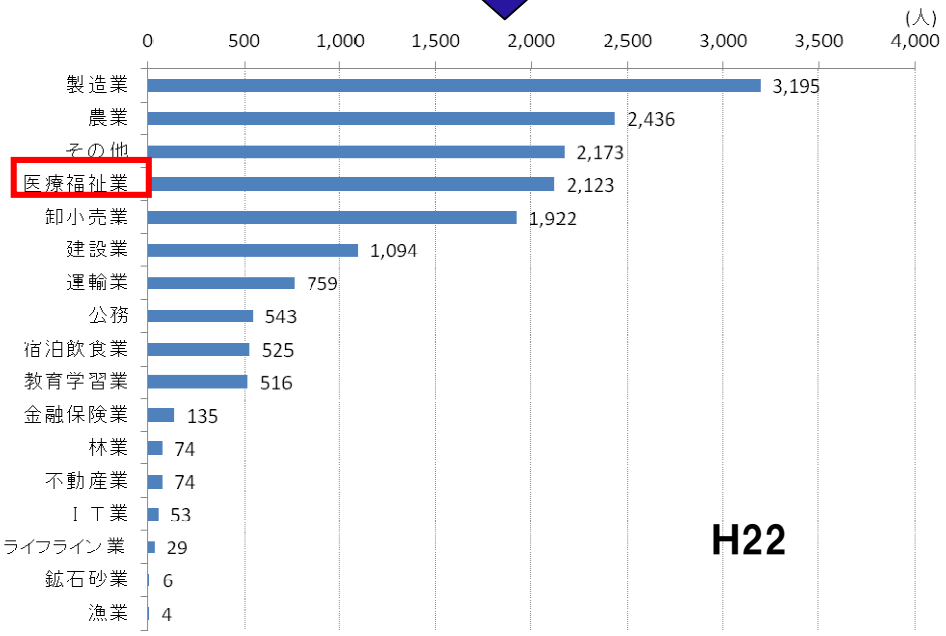
出典：国勢調査、国立社会保障・人口問題研究所　人口推計

4　産業構造

①　総従事者数

安芸高田市の産業大分類別従事者数は、製造業が最も高く、次いで農業となっています。H17→22 の推移をみると、軒並み従事者数が減少傾向にある中、医療福祉業の伸びが著しく、卸小売業に代わり上位につけています。





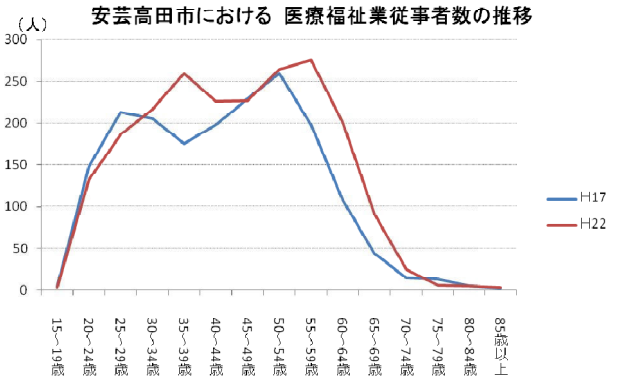
出典：国勢調査

② 産業別・世代別従事者数

◆ 医療福祉業

医療福祉業の従事者数は、ほとんどの世代で増加傾向にあります。高齢者人口の増加に伴い、今後も従事者数・求人ニーズは増加していくことが予想されます。

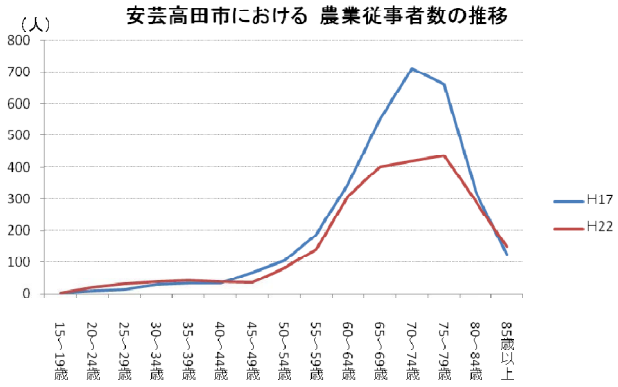
ただ、当該分野は全国的に有効求人倍率が著しく高い状況にあり、従事者の確保に向けた取組が求められます。



◆ 農業

農業の従事者数はリタイア組（65歳以上）に偏重している上、その世代の従事者数が大きく減少しています。

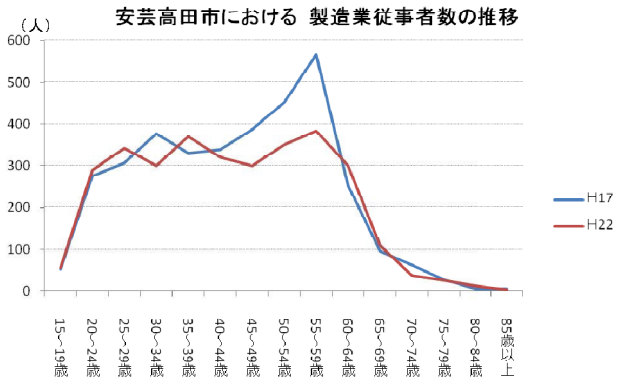
若者世代はわずかに増加していますが、全体の減少量に比べれば微々たる量となっており、産業維持の視点にたったとき、担い手確保は他のどの産業よりも喫緊の課題といえます。



◆ 製造業

製造業の従事者数は、ベテラン世代の早期離職が進んでおり、リーマンショックに端を発する業績悪化の影響が見て取れます。

ただ、若い世代の雇用規模は維持されていること、製造品出荷額の推移は近年持ち直していること等から、他産業に比べ、今後も比較的堅調に推移していくものと考えられます。

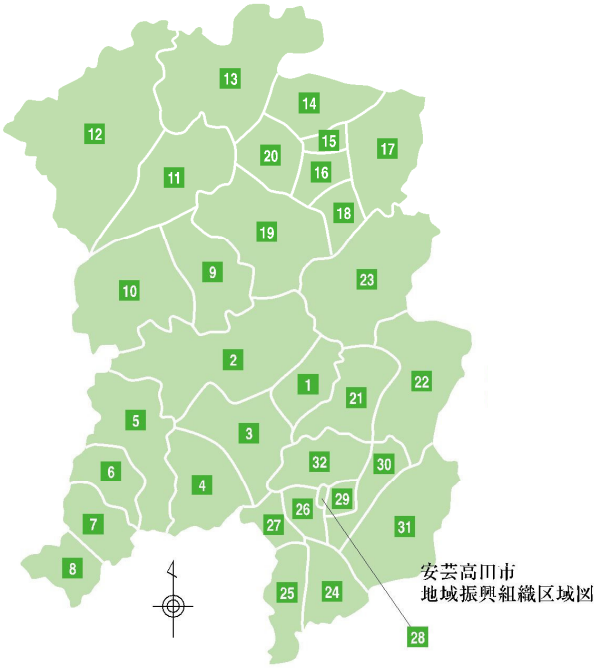


出典：国勢調査

5　まちづくり

当市には 32 の地域振興組織が設置されており、「協働のまちづくり」の重要な担い手として、地域課題の集約・整理を行うとともに、行政へつなぐ役割を担っています。また、各組織の活動連帯を図るため、旧町単位に 6 つの連合組織が設置されています。

地域振興井組織の規模は 50 戸から 2，000 戸程度までさまざまで、その大半は大字単位、小学校区単位で構築されています。また、組織の設置時期は地域によって異なっており、合併を契機に設立された組織から、30 年以上の歴史をもつ組織までが存在しています。



	組織名	設立年	世帯数	人口
1	吉田地区地域振興会	昭和53年	2,252	5,141
2	丹比地区地域振興会	昭和53年	661	1,567
3	可愛地区地域振興会	昭和53年	1,482	3,180
4	郷野地区地域振興会	昭和53年	548	1,320
5	土師・勝田地域振興会	平成15年 6月	340	738
6	佐々井地域振興会	平成15年 4月	448	946
7	下根振興会	平成15年 8月	441	1,100
8	上根・向山地域振興会	平成15年 7月	429	1,087
9	横田振興会	平成14年 3月	351	958
10	本郷地域づくり協議会	平成13年 7月	321	857
11	北振興会	平成13年12月	254	696
12	生桑振興会	平成14年 9月	246	602
13	川根振興協議会	昭和47年 2月	232	531
14	下佐振興会	昭和54年 4月	156	355
15	志部府親交会	昭和58年 1月	44	103
16	上佐一心会	昭和59年 6月	176	431

	組織名	設立年	世帯数	人口
17	船木振興会	昭和56年 7月	254	512
18	房後連絡協議会	昭和57年 6月	104	231
19	来原地区コミュニティづくり連絡協議会	昭和53年 7月	604	1,381
20	羽佐竹振興協議会	昭和57年12月	159	368
21	小原地域振興会	平成14年11月	643	1,528
22	小田東地域振興会	平成15年 1月	837	2,037
23	甲立地域振興会	平成14年 6月	732	1,825
24	保垣地区振興会	平成15年 7月	134	281
25	有留自治振興会	平成16年 2月	103	258
26	長田上地域振興会	平成16年 2月	148	322
27	長田下地域自治振興会	平成16年 2月	151	326
28	向井原地域振興会	平成15年12月	284	620
29	坂下地域振興会	平成16年 3月	237	581
30	坂中地域振興会	平成15年12月	188	433
31	坂上地域振興会	平成15年12月	142	297
32	戸島地域振興会	平成16年 2月	477	1,117

（世帯数・人口＝平成24年4月1日現在　住民基本台帳）

3　当市をとりまく基本課題

1　人口減少・少子高齢化への対応

前述したとおり、安芸高田市の総人口は今後も減少を続けます。また、現状のまま推移すれば、将来的には 85 歳以上人口が突出して多い人口構成となり、社会保障費の増大、産業の担い手不足といった問題が深刻化し、まちの存続そのものが危ぶまれることとなります。

この意味でこれからの 10 年は、高齢化社会へ適応していくための取組に加え、子育て世代の確保に向けた取組が極めて重要となります。

2　安全・安心の充実

近年、大規模な自然災害が多発しています。平成 23 年 3 月に発生した東日本大震災とそれに伴う原発事故は、防災政策の考え方を根本から見直す必要性を私たちに突き付けました。加えて、東南海地震は、今後 30 年以内の発生可能性が極めて高いと予想されています。全国的に多発する豪雨災害も、中山間都市である安芸高田市にとって他人事ではありません。

自然災害だけでなく、近隣国との間で発生している領土問題による軋轢は、西日本に住む私たちにとって言い知れぬ不安を感じさせています。

また、平成 24 年 12 月に中央自動車道で発生した笹子トンネル天井版落下事故は、老朽化した社会資本の危険性を世にしらしめました。

「安全・安心」は、もっとも重要かつ基本的な都市機能です。限られた財源の中、国・県・市・他自治体・住民が連携し、その機能を維持・向上していく必要があります。

3　エネルギー問題への対応

アジア経済の活性化、中東危機の影響から、近年化石燃料の価格高騰が続いています。エネルギーの大半を輸入に頼る我が国にとって、これは大きな損失です。

一方、一極集中型による電力供給体制の脆弱性が露呈した原発事故後、全国で再生可能エネルギーに対する関心が高まっています。平成 24 年 7 月に始まった固定価格買取制度（ＦＩＴ）は、我が国の再生可能エネルギーの普及促進に大きく貢献しています。

化石燃料の使用に伴う地球温暖化は、豪雨災害との因果関係も指摘されています。エネルギー問題への対応は、経済・安心両面において、今後さらに重要となります。

4　グローバリゼーションへの対応

平成 20 年 9 月に発生した、リーマンショックを契機とする世界的な金融危機を受け、安芸高田市も製造業を中心に従業員数の一時的減少が生じました。

近年、景況感は持ち直しつつありますが、近隣国製造業の著しい躍進、消費税率の引き上げ、価値基準の多様化（物質的豊かさから心の豊かさへ）といった情勢の中、世界と戦える品質と価値を持ったモノづくりが求められます。これは農林水産業も同様であり、ＴＰＰ交渉の行方を注視しながら、担い手確保を含めた戦略的対応が求められます。

また、近年は特定業種（建設業等）における移民受け入れの議論が活発化しています。「多文化共生」の考え方の下、外国人の方も「地域の構成員」と捉え、対等な関係を築きながら、社会参加を促していく必要があります。

5　情報通信技術のさらなる活用

情報通信分野の技術進歩には目覚ましいものがあります。スマートフォンやタブレット端末、ソーシャルメディアなど、全世界が双方向の情報通信ネットワークによって結ばれ、容易に情報を収集・発信することが可能となりました。

情報通信は、暮らしや働き方、社会そのものを大きく変える可能性を秘めています。安芸高田市は、これまでに光ネットワーク整備事業を完了させ、市内全域で高速通信を行える環境を整えました。

今後は、情報セキュリティ対策や個人情報保護対策の徹底など、情報管理への適切な対応を前提として、あらゆる分野でその導入を進めていくことが求められます。

第2章

基本構想

1　将来像と基本方針

1　将来像

人　輝く・安芸高田

～協働とワクワクがつなぐ、人と誇り～

当市の基本理念である「人　輝く・安芸高田」には、「自らの地域は自らの手で」という設立当時の想いが込められています。

少子高齢化への適応が求められる中、「自助・互助・共助」の考え方はますます重要度を増しています。その意味で、この理念は今も揺らぐものではありません。

ただ、助け合うだけでは人口減少を食い止めることはできません。助け合いをはじめ、他の基本課題を解決するプロセスの中で、「人が集う」魅力を高めていく必要があります。

私たちは、そのキーワードが「ワクワク感」だと考えました。

ワクワク感があるからこそ、「いいね！それやろう！」と仲間が集まり、外からも「なんだか面白そうだね！」と人が集まります。新しいワクワクが次々に生まれる空気感は、このまちに対する誇りの醸成にもつながるはずです。

このような思いから、これからの 10 年における将来像を

「人　輝く・安芸高田　～協働とワクワクがつなぐ、人と人～」に定めました。

2　基本方針

① 互いに助け合う　～市民、総ヘルパー！～

当市では、まちづくりの基本的考え方として早期から「自助・互助・共助」を打ち出し、「市民総ヘルパー構想」の推進に取り組んできました。

毛利元就が示した「助け合い」の精神は、今までも、これからも、このまちの行動原則として受け継がれていきます。

② 誇りを育む　～先人の知恵、次世代の熱意～

市民が培ってきた伝統・文化・知識等は、次世代へ継承すべき「先人の知恵」です。また、次世代がもつ「熱意」は、新しい時代を切り開く力を秘めています。

先人の知恵と次世代の熱意、それぞれに敬意を表して学び合う。その心が、このまちに対する誇りを育みます。

③ 魅力を伝え、ひとをつなぐ　～モノ・コト・キモチ～

モノ・コト資源は、そこに関わるひとの熱意や想いが加わることで、唯一無二の存在として輝きを放ちます。

資源単体が持つ魅力に加え、資源に込められたキモチまできちんと伝えていく。それが、より多くの「行ってみたい！」を生むきっかけとなります。

④ グローカルに働く　～Thinking Grovaly, Acting Localy～

モノ市場の海外シフトが進む中、国内ニーズは「モノだけでは解決できないこと」が増えています。

海外を含むソトとのつながりの中から解決策を見出し、地域に根差したニーズに応えていく。そこに、ワクワクする出会いとダイナミクスが眠っています。

⑤ 安心・快適・持続的な暮らしを支える　～選択！集中！～

どんなワクワクも、それを支える基盤があってこそ実現できるもの。ただ、限られた財源の中、すべてのニーズに応えることは困難です。社会情勢や市民ニーズを踏まえた選択と集中が、総合的に満足度の高いまちづくりを可能にします。

2　重点プロジェクト

※将来像実現に向け、特に力を入れること
※たとえば・・・

1　市民、総ヘルパー！推進プロジェクト

2　ワクワク人　誘致プロジェクト

3　ワクワク人　育成プロジェクト

4　もっと発信！プロジェクト

3　施策体系

互いに助け合う
～市民、総ヘルパー！～

住民自治　子育て支援　保健・医療
高齢者福祉　障がい者福祉

誇りを育む
～先人の知恵、次世代の熱意～

多文化共生　学校教育　社会教育
歴史・文化

魅力を伝え、ひとをつなぐ
～モノ・コト・キモチ～

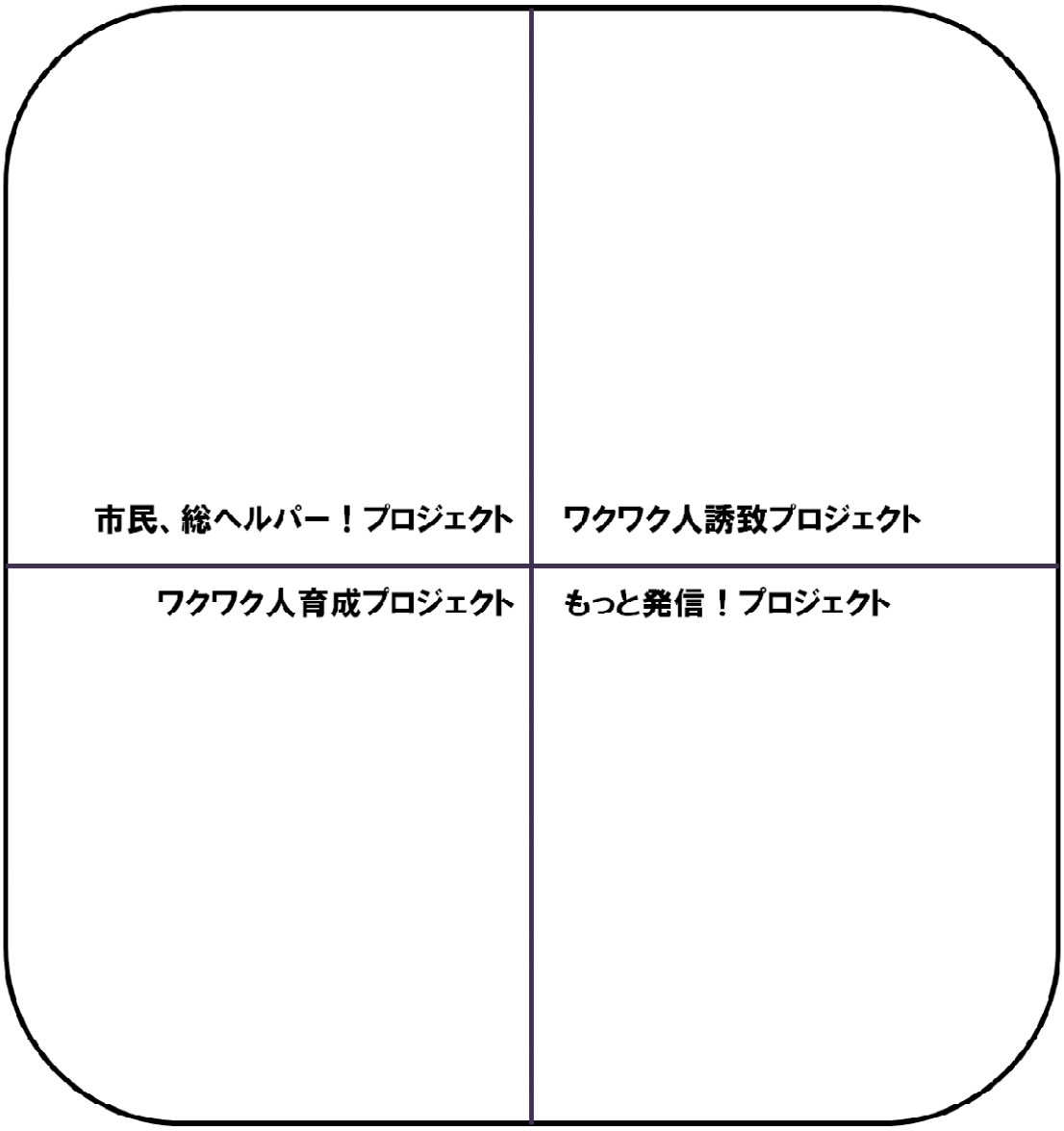
交流　定住　PR

グローカルに働く
～Thinking Glovaly, Acting Localy～

農林水産業　商業　工業　観光

安心・快適・持続的な暮らしを支える
～選択！集中！～

防災・防犯　公共交通　情報通信
道路　上下水道　再生可能エネルギー
環境衛生　自然環境　住宅　行財政



人　輝く・安芸高田

～協働とワクワクがつなぐ　人と誇り～

安芸高田市第2次総合計画

4　土地利用構想

1　都市機能の選択と集中

少子高齢化・人口減少が進む中、選択と集中の一環として、都市外延化の抑止・都市エリアの縮小による維持管理コストの低減が求められています。

当市では合併以降、タウンセンター、地域拠点を核とした都市機能の集約を進めてきましたが、今後もその取組を継続し、さらなる都市のコンパクト化を推進していきます。

2　地域のウリを明確にする、特色ある環境整備

地域の魅力を発信するにあたり、その地域のウリを明確にしていく必要があります。

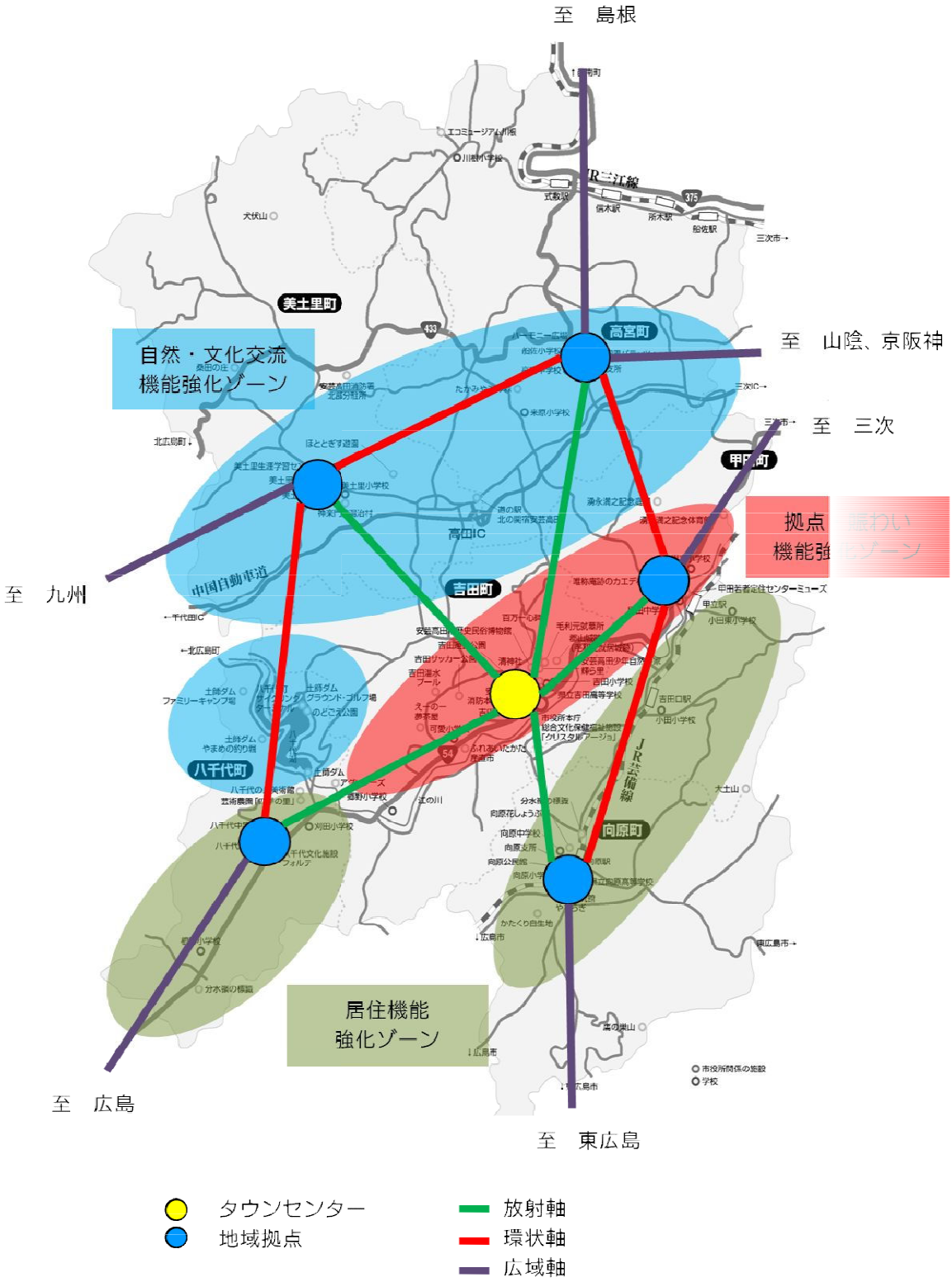
当市は、中国山地の山腹に位置している、中国道や国道 54 号といった幹線道路が東西に延伸している、南端に広島市が隣接している、といった立地特性を有しています。

このような立地特性に反映され、当市は、北部：自然・文化エリア、中部：都市エリア、南部：ベッドタウンエリア、の概ね３つのイメージに区分できます。

今後は、これらのイメージを活かした機能強化を進めていくことで、特色ある環境整備を図っていきます。

3　円滑な地域間連携を可能にする、ネットワークの構築

助け合いやグローカルな働き方の推進に向け、旧 6 町を網羅的に接続する放射軸・環状軸、ソトとのつながりを強固にする広域軸をベースに、道路・交通といった物理的ネットワークの円滑化を推進します。


至　島根
至　山陰、京阪神
至　三次
至　九州
至　広島
至　東広島
自然・文化交流
機能強化ゾーン
拠点
機能強
居住機能
強化ゾーン
美土里町
高宮町
吉田町
八千代町
向原町
甲田町
中国自動車道
高田IC
JR三江線
JR芸備線
タウンセンター
地域拠点
放射軸
環状軸
広域軸

5　効果検証の総合指標

1　設定にあたっての基本的考え方

① 指標値は総人口

本計画は、協働とワクワクをキーワードに、少子高齢化や人口減少に対応していくことを主眼に置いています。この意味で、効果検証の総合指標には総人口を用いることとします。

② ターゲットは、若者人口（30 代以下）

我が国全体で人口が減少する中において、総人口の減少は受け入れざるを得ません。ただ、たとえ総人口が減っても、子育て世代（20～30 代）や子供たちの数が増えていれば、未来に希望が持てる空気感が生まれます。

このため、総人口の目標値は、若者人口（30 代以下）の確保数を設定し、それを現状趨勢と合算することで算定しました。

③ 現実的かつ野心的な数値設定

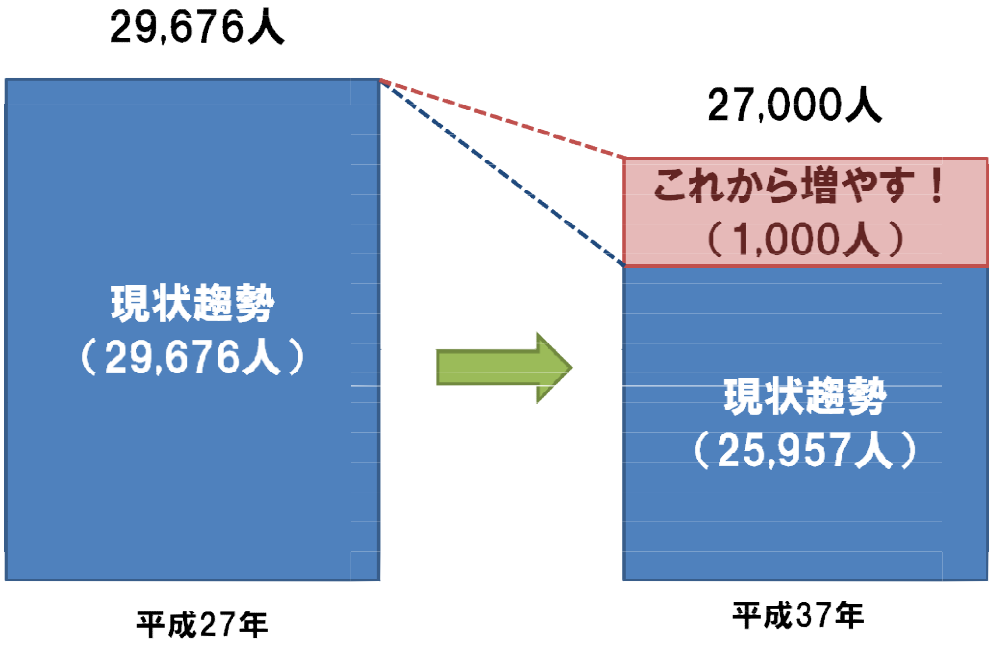
具体的な数値設定においては、定住する上で最重要となる住宅・雇用の視点から、これまでの実績やストック量、今後の整備計画等も踏まえ、現実的かつ野心的な規模を設定しました。

2　目標値:27,000 人！（仮）

※以下はすべて仮の数字

前項①～③を踏まえた独自推計の結果、当市における平成 37 年の目標人口には 27，000 人を定めることとしました。

この数は、「安芸高田市の持続」という視点に立てばまだ道半ばです。ただ、この数字は地域振興組織あたり約 30 人の若者が増えることを意味しており、「未来に希望が持てる空気感」を醸成するだけの力は持っていると考えます。



大人（20-30代）:750人
（独身500人、既婚250人）

子供:250人
（自然増50人、社会増200人）

6　計画の推進体制

1　実現困難なものから着手

後述する各施策（基本計画参照）については、長期的な検討や準備が必要になるものから率先して取り組み、即対応できるものを後年に回すことで、事業全体が計画期間内に確実に遂行されるよう配慮します。

また、即対応可の事業についても、予算等の状況を鑑みながら、できるだけ前倒しできるよう努めていきます。

2　毎年の進捗評価

これまで、当市では施策評価を毎年度実施し、施策ごとに進捗状況、成果、課題を整理するとともに、改善策を検討してきました。今後もこの取組を継続し、確実な遂行を図っていきます。

3　住民参画による効果検証（中間年、最終年）

ただ、前述の取組はあくまで「進捗」を評価するものです。施策は住民サービスとして実施するものであり、施策の「効果」は住民の満足度で評価すべきと考えています。

このため、中間年・最終年には住民アンケートを実施し、施策ごとの満足度を把握することで、その効果検証に役立てます。

効果検証に際しては、関係各課（課長クラス）、有識者等から構成された「安芸高田市第 2 次総合計画　効果検証委員会（仮）」を立ち上げ、第三者の視点も取り入れた客観的な検証を行います。

◆ **コラム欄**

（ネタ候補）

・住民アンケートの概要

・庁内協議会の様子

・前回計画の検証結果　等